

糖尿病性腎症患者の透析導入時期における患者が抱く家族への思い（第1報）

東病棟7階 ○木本未来 北山恭子 林倫代 道下小百合
岩住幸恵 山本絵里子 加藤恵里香 渡邊真紀

key word 糖尿病性腎症 透析導入 心理 家族

はじめに

近年の透析導入患者の特徴として、糖尿病性腎症による患者が急増し2000年には透析人口の36.6%になり、慢性糸球体腎炎の32.5%を抜いて第1位となっている¹⁾。糖尿病性腎症と指摘され透析導入された患者はすでに何らかの合併症を持っており、治療を円滑に維持することが難しいと言われている²⁾。また、透析患者の心理分野でもっとも専門家と言われる春木は、最近では「むつかしい」患者といえ、糖尿病性腎症と相場が決まっていると述べている³⁾。

当病棟でも多数の糖尿病性腎症の患者が透析導入を目的にシャント作成手術と、初回透析を受けるために入院される。透析における看護援助は、患者の生活調整が主体であり、透析導入時期は、まず透析療法を受け入れるところから始まり、患者本人の透析受け入れに対する心理的サポートが重要といわれている⁴⁾。現在、透析導入時期の患者への看護援助として当病棟で実際に行われているのは、本人に対して退院後の生活に向けてセルフケアへの知識提供と技術指導が中心になっている。

これまで実際に糖尿病患者と家族に関わった際に、患者は糖尿病を患っていることで、家族に対して孤独感を抱いているなどの深い思いを知った経験がある。更に、糖尿病性腎症患者の透析導入時期においても、「家族にこれ以上迷惑はかけたくない」「自分は何も役に立たない」といった孤独感を感じさせる思いを聞いた体験がある。これらの体験から、糖尿病を持ち合併症を抱えながら、療養生活を送ってきた患者が透析導入という危機の中で、家族に対する孤独感がどのように患者に影響するのだろうかと考えた。糖尿病患者教育として、家族は患者を支える大きな存在として位置付けされていると言われており⁵⁾、透析導入時期における受け入れもまた、この家族の存在を切り離せないと考えられる。しかし、糖尿腎症患者と家族とのお互いの思いについて調査

されている研究はない。

そこで、今回はまず第1段階として、糖尿病性腎症患者の透析導入時期に抱く家族への思いを明らかにすることを目的とした。この研究の意義は透析導入時期における心理的支援方法の検討に役立つことである。

なお、透析導入時期とは、シャント作成から透析開始6ヶ月後までとした。

I. 目的

糖尿病性腎症の透析導入時期における患者が抱く家族への思いを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究デザイン
2. 調査期間：平成16年8～9月
3. 調査対象

過去6ヶ月以内に初回透析を受けるために入院された糖尿病性腎症患者4名のうち研究の同意を得られた2名である。対象者背景については表1のとおりである。

4. データ収集

半構成的面接及び医療記録調査にてデータを収集した。面接は病院内の一室で研究者2名が行った。面接データは同意を得た上でテープに録音した。

5. 分析方法

録音した面接内容を逐語録にし、それを熟読した。情報を整理する為に、便宜上、感情や情緒、行動や思考をまとめ、全体を把握しやすくした。家族への思いについて語られている文章から、読み取れる大意を抽出した。

6. 倫理的配慮

面接から得た情報が患者個人を特定できないように配慮し、対象者に家族の思いを明らかにしていただくことの同意を得た上で研究を行った。

表1 対象の背景

	性別	年齢 (歳)	職業	DM歴 (年)	合併症の有無	家族構成	現在の透析回数
A氏	女	56	なし	11	網膜症、神経症、腎症、大血管障害	夫・姑・息子夫婦・孫の6人家族 (キーパーソン：夫) 別居：娘	2回/週 3時間/回
B氏	男	51	会社員	16	網膜症、腎症	妻と2人家族 (キーパーソン：妻)	3回/週 3時間/回

Ⅲ. 結果

【A氏】、【B氏】それぞれから、家族に対しどのような思いを抱いているのか抽出した。

【A氏】

1. 家族に対する思い

- 1)透析導入以前から続く姑・嫁に対するあきらめ・憤り
- 2)透析導入以前から続く夫に対するあきらめ・憤り
「昔から亭主関白で何もしない人やったし、全然期待してなかった。だから辛くても言わなかった。」
- 3)夫に対する長男の嫁としての役割を果たせていないことへの申し訳なさ
- 4)1)～3)からの影響による家族の中での孤独感
- 5)子供からの愛情
「娘から生きていて欲しいと言われるんや。」
- 6)子供に対する生きがい
「最初に透析をやってみようと思えたのは長く生きたいため。娘のためにしてやりたいことがある。だから、少しでも長く生きたい。」
- 7)透析生活に入ってからからの夫の行動変容に対する驚き
「何も言わないのに自分から進んでわしがしてやって言ってくれる。以前はこれは食べれん、あれはだめやって言うと、じゃあ、お前がやれって言う言葉があったのにそれがなくなった。」
- 8)透析生活に入ってからからの夫の行動変容に対する感謝
「よくやってくれると思う」
- 9)透析生活に入り、夫の行動変容に対する決意
「自分の意思是伝えていかないとと思う。今ではさりげなく思ったことが言えるようになった。」

2. 夫の行動変容に対する患者の推測

- 1)患者の疾病に対する死への危機感と孤独感
- 2)患者の疾病に対する辛さの理解

【B氏】

1. 家族に対する思い

- 1)妻の落ち込みに対する辛さ
 - 2)透析や障害者について妻との考え方の違いに対する辛さ
「妻のほうが本人よりも、これからずっと透析しないといけないということや、1級障害ってということがショックやった。自分が前向きに感じていても、夫婦でさえ、そういう風に考えないんやなと思ったら辛いよ。」
 - 3)透析や障害者について妻との考え方の統合による喜び
「2人の考え方(透析や障害者)が近付いてきた。妻が前みたいに元気になってよかった。」
 - 4)妻の協力に対する感謝
 - 5)妻の協力に対する決意
「2人3脚の姿勢が大切。(透析生活に入る)前はもっと肉食わせろとか文句を言ってけんかになっていたけど。今はけんかしなくなった。妻の食事管理の負担を軽くしてあげたい。だから、妻にあんまり神経質にやらなくてもいいよって言うてる。」
- ##### 2. 妻の落ち込みに対する患者の推測
- 1)食事管理に対する負担感
 - 2)障害者の妻になることに対して、良いイメージがないことから抱く悲嘆「やっぱり障害者っていいイメージないんじゃないのか。だから妻は落ち込んだと思う」

Ⅳ. 考察

糖尿病性腎症患者の透析導入時期に患者が抱く家族への思いが患者にどのように影響しているのかについて考察した。

2型糖尿病患者の家族への配慮の研究では「家族には

家族の生活がある」、「糖尿病は自分だけの問題である」という思いのデータが報告されている⁶⁾。【A氏】の1)～3)の諦めや、憤り、申し訳なさは透析導入以前から持っているものである。そのため、大きな危機である透析導入となる以前から、糖尿病及び、糖尿病から始まる様々な合併症に対して自分の病気は自分で解決するものとして捉え、行動してきた可能性がある。これは、家族との疾病に関する共通理解を大きく障害してきたと予測される。以前から持っていた「自分で解決するもの」という意識の状態、透析導入をきっかけに否応なく家族に協力依頼する部分が大きくなるのが重なったことで、4)の孤独感を抱いていたと考えられる。

5)子供からの愛情、6)娘に対する生きがいは生きる意欲につながっており透析導入の危機を乗り越えるための大きなきっかけとなった。患者が自分の危機を乗り越えた体験を意識でき、言葉として表出していることは、今後、透析生活を確立していく上で、様々に起こってくると予測される危機を乗り越えていくための強みとなる。看護者として、患者の話を傾聴し、患者自身が語った思いの中から治療や療養に対する意味を見出していけるように危機介入していくことは重要なことであり今後の看護に生かしていきたいと考える。

【B氏】の思いでは、障害者の妻になることに、妻は落ち込み、その姿をみて患者は辛い思いを抱いていた。透析導入を大きい危機として捉え関わっていたが、障害者になることにしても患者、家族にとって大きな危機となりうる事が分かった。このことから、透析導入時期において、本人に対する退院後に向けてのセルフケアへの知識提供の際に、本人、家族に対して障害者になることについても、情報提供していくことの重要性が示唆された。今後は看護師の社会面に対する知識の向上や、十分にソーシャルワーカーと連携をとっていくことが必要であるといえる。

【A氏】【B氏】とも共通していた点としては、家族の行動、感情の変化から患者自身が相手の思いを推測していたことである。その推測は、【A氏】の9)や【B氏】の5)にあるように、患者の決意として表れ、患者の行動変容につながっていた。【A氏】は、夫の行動変容、言葉の変化から、夫の気持ちを推測し、夫が妻への死に対する危機感と孤独感を抱き、自分の疾病に対する理解を示してくれたと感じることができた。そのことが、7)～9)の思いにつながっていたと考えられる。夫に対して

諦めという思いであったのに、感謝と「自分の意志を伝える」という決意を抱けたことは、患者自身に対するいたわりへの行動変容になったと考えられる。【B氏】は、妻の落ち込みから、妻の気持ちを推測し、妻の食事管理への負担を感じることができた。そのことがきっかけとなり、食事に対する意識付けを強め、3)～5)の思いにつながっていたと考えられる。食事管理の負担を少しでも軽くしてあげたいという決意を抱けたことは、透析前後で妻の食事を作るという役割自体に変化はないが、患者は食事療法に対して守ろうという姿勢で取り組むことができ、行動変容につながったと考えられる。これらのことから、家族、特にキーパーソンの行動や感情を通して患者が推測する思いは、患者自身の意識、そして行動に大きく影響していることが分かる。今回の場合、その影響は患者に良い変化をもたらしたように思えるが、逆に悪い影響をもたらす可能性もある。家族システム看護では家族員どうしの悪循環とその背景となるそれぞれの家族員の考え方をを見つけ出して、悪循環を断ち切るように働きかけることの重要性が述べられている⁷⁾。このことから、家族の行動背景と、患者が推測する思いに大きなズレがあった場合、長い透析生活において何らかの支障を来す危険性が予測される。そのため患者・家族それぞれの思いを、両者の間で確認しあい、ズレを埋めていくことは非常に重要と言える。そこで、看護者は患者本人・家族が体験していることや思いを共に語る場を作り、お互いが治療や療養する意味を見出し、共有できるよう援助していくことが大切となってくる。

今回は第1段階として、患者が抱く家族への思いを明らかにすることを目的とし患者のみを対象としたため、家族の行動背景を確認することができなかった。今後の研究の方向性として、透析導入期における家族の行動背景にある思いを明らかにしていく必要があり、家族を対象としていくことを考えている。また、看護の方向性として、患者・家族が共に語ることを通して、患者・家族がそれぞれの担う役割と医療者が支援する部分を明確にできるようにし、治療や療養を維持する為の家族の支援体制を強化していくことを目標としていきたい。

V. 本研究の限界

今回対象人数が2人ということで、対象者の少なさから今回の結果からは一般化するまでには至らないと考えられ、今後も症例を重ねていく必要がある。

VI. 結論

1. 家族への思いの中には、家族に対しての思いと、家族の行動や感情の変化から推測する思いがあった。
2. 透析導入時期に抱く家族への思いは患者の行動変容に大きく影響していた。

引用文献

- 1) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現状(2000年12月31日現在)、日本透析医学会誌、35(1)、P1-28、2002
- 2) 宇田有希：特集 糖尿病看護のパラダイムシフト：指導から援助へ 透析導入になった糖尿病患者への援助、Quality Nursing Vol.7 No.6、P21-26、2001
- 3) 春木繁一：患者・家族の教育－はたして「教育」で済むのか？、臨床看護 Vol.19 No.8、P98-101、2003
- 4) 林優子・金尾直美・内田陽子：特集 糖尿病患者の看護；最新の知識と看護のポイント 透析導入糖尿病患者のケア、臨床看護 第27巻第3号、P393-397、2001
- 5) 稲垣美智子・村角直子・河村一海、他：糖尿病患者と家族への教育方法の検討－患者同席による家族面接の構造－、金沢大学医学部保健学科つるま保健学会誌 Vol.25、P91-97、2001
- 6) 高見知世子・岡田奈穂・小坂桃子、他：成人2型糖尿病患者が抱く配慮と行動の実態、日本糖尿病教育・看護学会誌 Vol.8特別号、P142、2004
- 7) ジャニス・M・ベル：カルガリーモデル－家族看護学の実践・研究の課題－、翻訳・文責 牧本清子、家族看護学研究 第5巻第1号、P26-33、1999

参考文献

- 1) 稲垣美智子・平松知子・河村一海、他：血液透析導入期における患者の気がかりおよび食事に対する思いの特徴－糖尿病由来の有無での比較－、金沢大学医学部保健学科紀要 Vol.23 No.1、-78、1999
- 2) 平松知子・稲垣美智子：糖尿病腎症患者の透析導入期の透析および食事に関する思い－成人および高齢者の比較－、金沢大学医学部保健学科紀要 Vol.22、P199-202、1998
- 3) 堀川直史・山崎友子・加茂登志子：特集 透析患者とリエゾン精神医学 I糖尿病患者の透析導入前後とリエゾン精神医学、臨床透析 Vol.16 No.10、P1583-1590、2000

- 4) 稲垣美智子・早川千絵・井村香積、他：2型糖尿病患者をもつ家族の食事療法における協力体制形成過程、金沢大学医学部保健学科つるま保健学会誌 Vol.25、P75-82、2001
- 5) 坂本洋子：特集 臨床ナースのための血液浄化療法のすべて 患者ケアのポイント 透析患者全般の心理的ケア、臨床看護 第26巻第12号、P1814-1819、2000